

## 新理事長就任にあたってのご挨拶

日本臨床死生学会

理事長 飯森眞喜雄（東京医科大学精神医学講座）

日本臨床死生学会第18回大会（2012年11月23～24日、窪寺俊之聖学院大学教授大会長）に併せて開かれた理事・評議員会ならびに総会において、長山忠雄理事長の後任として新理事長を拝命いたしました。

本学会は1995年10月7日に創設され、故加藤正明先生、平山正実先生、そして長山忠雄先生と理事長が受け継がれ着実に発展してきました。

本学会の目的は創設趣意にあるように、メンタルヘルスの視点から生と死にかかわる諸問題を学際的に研究・教育・実践していくことです。生死にかかわる問題は直線的に結論がでるものではなく、またひとつの観点だけから語られるものでもありません。医学や医療の流れはもとより、その時代の社会の動き、文化、さらには東日本大震災のような自然現象や大規模災害によっても影響を受けつつ、多面的に、また行きつ戻りつしながら、地道に議論されていくものでしょう。そのために本学会には、医学、看護学、心理学、生命倫理学、哲学、社会学、法律学、宗教学、当事者など多様な立場からの参加が不可欠であり、実際に過去18回の大会長もそれぞれの分野を代表する方々に担当していただいできました。また、会員の構成も多岐にわたっています。

こうした学会をまとめ、メンタルヘルスの向上と医療、社会への貢献をしていくことは容易なことではないと思います。しかし、会員数は着実に増加しつつあり、年次大会も充実し、学会誌に掲載された論文の引用も増えてきています。さらに特筆すべきは、地道な活動の普及によって、本学会が生みの親である「臨床死生学」という言葉が、いくつかの大学や大学院の講座名やゼミ名に使われるまでになったということではないでしょうか。

「臨床」という言葉は、一般的には診療行為を指して使われていますが、本義は文字通り「(病める人や死に逝く人の) 床に臨む」という意味です。生まれながらどこかで大小の花を咲かせながら死への道を確実に歩いていく運命にある我々にとって、あらゆる場所や状況が「死の床」であり、そこに「臨み」、そしてその人にかかわっていくのが「臨床死生学」なのです。

この秋には、事務局長の小野允一先生のご尽力と多くの方々のご協力により、我が国で初めて、生と死をめぐる諸問題をテーマにしたテキスト——『臨床死生学』の教科書がシリーズで刊行の運びになります。

本学会が扱う問題は、たとえば高齢者の急増とそれに付随する胃瘻のような延命処置、治療を拒否するという態度を含むがん治療の多様化、再生医療をめ

ぐる再生と死の問題、出生前診断や遺伝子診断、在宅死や孤独死、大規模災害による遺族のケア等々、学会創設時と比べても膨らむ一方です。

こうしたなか、長山前理事長の後を継いで本学会を率いていくには、一精神科医である私は力不足であることを痛感しております。しかし、以前と変わらない会員諸氏の熱意とご協力があれば運営していくことはできそうな気がいたします。従前に増して、理事・評議員をはじめ会員諸氏のご指導とご協力をお願い申し上げ、理事長就任のご挨拶といたします。